

夜の進軍らっぱ

小川未明

青空文庫

やまなかむら
 山の中の村です。雪の深く積もったときは、郵便もなかなか
 こられないようなところでした。父親一人、息子一人のさびし
 い暮らしをしていましたが、息子は、戦争がはじまると召
 集されて、遠く戦地へ出征してお国のために働いていまし
 ました。

おじいさん、息子さんのところから、たよりがあったかい。」
 と、顔を見ると村の人はきいてくれました。

「あ、こないだあった、達者で働いているそうだ。もう、あち
 らは川の水も凍ったということだ。」

「まあ、達者で、お国のために働いていてくれれば結構なこ

とだ、神^{かみ}さまを拝^{おが}んで、めでたく凱^{がい}旋^{せん}するのを待^まっていていらつしやい。」と、村^{むら}人^{びと}は、老^{ろう}人^{じん}を元^{げん}氣^きづけたのです。

「なんの、お国^{くに}へ捧^{ささ}げた忤^{せが}れだもの、それに今^{こん}度^どの戦^{せん}争^{そう}は長^{なが}いというから、無^ぶ事^じに帰^{かえ}つてくるとは思^{おも}っていないが、どうか、りっぱにやつてくれればと祈^{いの}っているのさ。」と、老^{ろう}人^{じん}は答^{こた}えまし

た。

おじいさんは、口^{くち}ではそういつても、夜^よが明^あけると、日^ひが暮^くれるまで、息^{むすこ}子の身^みの上^{うへ}を案^{あん}じていました。そして、雪^{ゆき}が積^つもつて道^{みち}のついでにないときには、郵^{ゆう}便^{びん}が山^{やま}へ上^あがれまいと思^{おも}つて、村^{むら}のおけ屋^やまで出^でていつて待^まつこともありました。おけ屋^やには、学^が校^{っこう}へいく子^こ供^{ども}もあつて、もし戦^{せん}地^ちの息^{むすこ}子さんからきた手^て紙^{がみ}な

ら、かならずその日ひの中うちに届とどけてやるからというのであるが、おじいさんは、それが待まてなかつた。ある雪ゆきのたくさん降ふつた日ひのことです。わざわむら村まで下おりていつて、

「手紙てがみはきていなかつたかいのう。」と、きいたのでした。

「いえ、こなかつたぞ、くれば、とどけてやるものを。」と、おけ屋やのおかみさんは、いいました。

「あまり昨夜雪ゆうべゆきが降ふつて、昼前ひるまえは道みちがなかつたから、この家いえへ置おいていったかと思おもつたので。」と、おじいさんは、笑わらいました。春はるになつて雪ゆきが解とければ、夏なつ、秋あきへかけては、町まちからこの村むらまで三里りばかりの間あいだをバスが通とおりました。けれど、この村むらから、おじいさんの住すんでいる山やまの中なかまでは、一里りちか近く、峠とうげつづきの細ほそい

道みちを歩あるかなければならぬのでした。山やまには、幾軒いくけんも家いえがなかつたのです。

おけ屋やのおかみさんが、いいました。

「おじいさん、町まちの醬油屋しょうゆやさん知しつていなさるだろう。二、三日にちまえ前まえあすこへ寄よつたら、このごろ毎まい晩ばん、戦地せんちからラジオの放ほ送そうがあつて、あちらのようすが手てに取とるようにわかるといふことだぞ。」

「ほう、戦地せんちのようすがわかるとな。」と、おじいさんは、自分じぶんの耳みみを疑うたがいました。

圀いろり炉ろ裏りに火ひをたいて、子供こどものたびを乾ほしていたおかみさんは、
「わかるつていうことだ。」と、いいました。

「ほんとうなら、きいてみたいもんだのう。」と、おじいさんは、しよぼしよぼした目^めを大きく開^{ひら}きました。

ちようど晴^はれ間^まとみえて、日^ひが雪^{ゆき}の上^{うへ}を射^さしました。町^{まち}へいく道^{みち}には、人^{ひと}の影^{かげ}がちらほらしています。おじいさんは、山^{やま}へ帰^{かえ}るかわりに、町^{まち}の方^{ほう}へ向^むかつて、ぼつぼつ歩^{ある}いていました。

醬^{しょう}油^ゆ屋^やというのは、昔^{むかし}からある店^{みせ}で、この近^{きん}在^{ざい}の人^{ひと}々^{びと}を得意^{とくい}としていました。おじいさんも日^ひごろ知^しっているのです、その家^{いえ}を訪^{たず}ねたのであります。

「こんにちは。」

「おお、おじいさんか、息子^{むすこ}さんのところから便^{たよ}りがありましたか。」と、店^{みせ}の主^{しゅ}人^{じん}がききました。

どこへいっても、知る人は、かならず息子のことをたずねてくれます。おじいさんは、うれしく思いました。これも、お国のためにつくせばこそ、みんなが、心にかけてくださるのだと、ありがたく感じていました。

「悴よ、おまえのために、私までが鼻が高いぞ。」と、老人は、心の中こころなかでいうのでした。

「じつは、悴のせがれいつている戦地せんちから、ラジオでむこうのようすがわかるというので、ぜひききたいと思つてやってきました。」と、おじいさんはいいました。

「おお、そうか、無理むりのないことだ。」と、主人しゅじんは、おじいさんを家いえへ上あげて、いろいろもてなしてくれました。

おじいさんは、醤油屋しょうゆやの主人しゅじんの造つくった自慢じまんの菊きくの花はなをな
めたり、かごに飼かっているこまどりの声こえをきいたり、また、たる
を洗あらうてつだいなどをしたりして、夜よるになるのを待まっていました。
茶ちやの間まには、いつか明あかるく電燈でんとうがついていたのです。

「さあ、おじいさん、ここへいらつしやい、もうすぐあちらから、
きこえてくるから。」と、主人しゅじんがいったので、おじいさんは、
ラジオの前まえにすわって、耳みみを傾かたむけていました。

「おじいさん、息子むすこさんの声こえがきこえるわけではないが、ただあ
ちらのようすがわかるというだけです。」と、主人しゅじんは、あま
りおじいさんが、真剣しんけんな顔かおつきをしているので、息子むすこの声こえでも
きくつもりでいるかと思おもって、いいました。

「はい、それは、知しっております。ただあちらのようすだけきけば、満まん足ぞくしますだ。」

このとき、アナウンサーのこえ声が、電波でんぱに送おくられてきたのです。

「こちらは、やせんほうそうきよく〇〇野戦放送局よせんほうそうきよくです。いま〇〇部ぶ隊たいが、〇〇へ向むかつて、進軍しんぐんの準備じゆんびに忙いそしいのであります。その状じようきよう況きようをお

ききとりください。」

こういい終おわると、ヒ、ヒン！ という軍馬ぐんばのいななき声こえがしました。つづいて、ブーン、ブーンと、飛行機ひこうきのようなり音おとがします。それから、タ、タ、ターというらっぱのひびき、ガタン、ガタン、ゴーという戦車せんしゃの走る音おとがしました。

そうかと思おもうと、兵隊へいたいさんたちが、なにか仕事しごとをしながら、

うたっている歌のうた声こえがきこえてきたのです。

勝かつてくるぞと勇いさましく、

誓ちかつて国くにを出でたからは、

手柄てがら立たてずに死しなりようか、

進しん軍ぐんらつばきくたびに、

まぶたに浮うかぶ旗はたの波なみ……。

おじいさんの目めからは、涙なみだが流ながれていました。「今夜こんやは、泊とま

つていらつしやい。」と、主人しゅじんはしんせつにいつてくれたけれ

ど、おじいさんは、戦せん争そうにいつている息子むすこのことを思おもえば、ま

た息子むすこと同おなじような兵士へいしたちのことを思おもえば、体からだじゆうが熱あつくな

つて、これしきの寒さむさがなんだ。暗くらい道みちがなんだという気き持もちに

なりました。さいわいにいい月夜つきよだったので、主人しゅじんにお礼れいをい
つて、そこを出でました。

町まちをはなれると、さすがに、町まちから村むらの方ほうへいく人影ひとかげは見みえ
なかつたのです。おじいさんは、独りひと雪道ゆきみちを月つきの明あかりで、と
ぼとぼと歩あるいて歸かえりました。ものすごいような青あおみを帯おびた月つきの
光ひかりです。雪ゆきの野原のほらは、銀ぎんのようにかがやいて見みえました。そして
遠とおくの森もりの影かげは、黒くろい着物きものをきた人ひとが、じつとして雪ゆきの中なかに立たっ
ているのに似にています。おじいさんは、いましがたラジオできい
た、兵隊へいたいさんの歌うたが耳みみについて、思おもい出だされて、熱あつい涙なみだが、ほ
ろほろと流ながれてきました。

ゴウ、ゴウと、音おとをたて北風きたかぜが募つのりはじめました。空そらを仰あおげ

ば、月つきをかすめて、黒い雲くろくもが、幾いくつも連つらなつて、きつねかおおか
 みの群むれが、後あとから後あとから駈かけていくように、西にしの方ほうから、東ひがしの
 空そらに向むかつて走はしつていました。そして、東ひがしの空そらの果はては真まつ暗くらに
 なつて、星ほしの光ひかりすら見みえなかつたのです。

「また、吹雪ふぶきになつてきた。」と、おじいさんは独ひとり言ごとをして、
 のはら 野原みちの道いそを急いそいでいました。わずかに昼間ひるま、人ひとの通とおつた足跡あしあとが、
 ゆきおもて 雪ゆきの面おもてがついていゝるばかりでした。

たちまち、月つきの光ひかりはかげつてしまつて、風かぜにまじつて、雪ゆきがち
 らちらと降ふり出だしておじいさんのえりもとへ入はいつたのです。

「とうとう困こまつたことになつたぞ。」

まだあちらの村むらへ着つかないうちに、まつたく目めも口くちも開あけられ

ないような吹雪ふぶきとなつてしまいました。おじいさんは、一歩ぽも、

この吹雪ふぶきに向かつては歩あるけなくなりました。

それでもおじいさんは、ようやくの思いで、村むらはずれの小ちいさな神社じんじやにたどりつきました。そして軒下のきしたにちぢこまつて、吹雪ふぶき

のやむのを待まっていました。知らぬ間まに疲つかれが出て、うとうとと眠ねむつてしまったのです。社やしろの境内けいだいにあるすぎの木の枝えだから、ドタ、ドタといつて、積つもつた雪ゆきが落おちました。すると粉雪こなゆきが風かぜに舞まつて、おじいさんの上うへへ吹きかかりました。

「あつ、眠ねむつてはいけない、よくこれで凍こごえ死じぬのだ。」

おじいさんは、眠ねむいのを我慢がまんして、夜明よあけを待まとうと思おもいました。そして、道みちがわかるようになったら、帰かえろうと考かんがえていまし

た。

おじいさんは、いくら眠るまいと思つても、またうとうと眠つてしまつたのでした。このとき、がやがやという人の声がして、おじいさんは、ふたたびおどろいて目をさますと、吹雪はやんで、月の光が、明るく雪の世界を照らしていました。

「いまごろ、なんだろうな。」

顔を上げて、あちらの道を見ると、旗を立て、町の方へいく、出征兵士を見送る人々の群れでした。

「おお、どこか遠い村の人で、停車場へ、兵隊さんを送つていくのだな。」

おじいさんは、神前の階段から身を起こました。そして、

いのちたす
命を助けてくださった神さまに向かつて、手を合わせて拝んでか
ら、道みちの方ほうへ、雪ゆきの中なかを泳およぐようにして出ていきました。

「ご苦労くろうさんです。たいそう早いお出でかけですのう。」と、おじ
いさんは、声こえをかけました。

「はい、一番ばんに乗りのますのに、おくれてはたいへんだと思つて、
早はやめに出でてきました。」と、兵隊へいたいさんのお父とうさんらしい人ひとが、

いいました。

「吹雪ふぶきがやんでしあわせです。悴せがれも出しゅっせい征せいしていますので、私わたし
も、お見送みおくりさせてもらいます。」と、おじいさんは、みんなの
中なかへ加くわわりました。

「あんたは、また、どうしてこんなにお早はやく。」と、問とわれたの

で、おじいさんは、町の醤油屋でラジオを聞いて、帰りにひどい吹雪に閉じこめられたことを歩きながら物語ったのです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「夜の進軍喇叭」アルス

1940（昭和15）年4月

初出：「台湾日日新報 夕刊」

1939（昭和14）年3月1日、2日

※表題は底本では、「夜《よる》の進軍《しんぐん》らっぱ」となっています。

※初出時の表題は「夜の進軍喇叭」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年6月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夜の進軍らっぱ

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>